

氏名(本籍)	佐藤 琢三(千葉県)		
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博乙第1686号		
学位授与年月日	平成13年1月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	文芸・言語研究科		
学位論文題目	動詞の自他の構造と意味		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	湯沢 質 幸
副査	筑波大学教授		高田 誠
副査	筑波大学教授	P h . D .	岡崎 敏 雄
副査	筑波大学教授		坪井 美 樹
副査	筑波大学助教授		矢澤 真 人

論文の内容の要旨

本研究は、現代日本語における動詞の自他に関わる問題を、様々な角度から包括的に論じたものである。

日本語の言語学的研究においては、これまでも、自動詞と他動詞の問題は様々な論じられてきたが、本研究では、これら先行の研究を批判的に捉えなおしながら、大きくは以下の2点を論点として取り上げて、この問題に対する議論を展開している。

第1点は、動詞の自他対応の位置づけの問題である。本研究では、自他の対応を「重なる(kasan-aru)」と「重ねる(kasan-eru)」のように、語根(ここではkasan-)を共有する自動詞と他動詞の対であると定義し、これら自他の対応を受動、使役といった文法カテゴリーと対置しつつ、ヴォイスの体系の中にかに位置づけるかを論じている。さらに、翻っては、そのことによってヴォイス体系の姿を描くことができ、自他の対応に対してさらに深い理解が得られると主張している。

第2点は、自動詞と他動詞のそれぞれの領域における意味の広がりの問題である。自動詞と他動詞の相違は基本的には目的語の有無という点に求められるが、一方、両者はそれだけでは片づけることのできない特有の意味の広がりを見せるとして、本論文では、特に意味的に透明度の高い語彙項目に注目することによって、この問題を巡る議論を展開している。透明度が高い語彙項目とは、動作や結果の状態などのあり方が特定化されていない動詞を言うとし、これらの動詞は、そのような特定化から来る意味上の制約を受けることがなく、多様な意味拡張が可能であることから、文法的な意味の分析に適していると主張している。

本論文は、4部7章からなっている。

第I部では、日本語のヴォイスについて、先行の研究を検討しつつその問題点を揭示し、動詞の自他対応のヴォイス体系における位置づけをプロトタイプ論を用いて論じている。すなわち、ヴォイスについて、形態、統語、意味それぞれの側面において一定の条件を設定し、それらの条件を総て満たすものをヴォイスのプロトタイプと規定した上で、自他の対応が、「主語を中心とした関与者と動詞の示す動きとの関係に対立的に示す」という機能を有する形態論的なカテゴリーであり、受動や使役とともにヴォイスのプロトタイプに当たるという主張を展開している。さらに、対応の一方を相対自動詞とし、これと受動態との関係を具体的に検証することによって自他対応と文法的ヴォイスとの関係を論じている。

第Ⅱ部では、自他対応の内的な成立要因について論じている。ここでは、動詞を自他の対応を有する「相対動詞」と一方の欠落している「絶対動詞」とに分け、自他対応という現象によって積極的に規定される「相対動詞」にこそ、自他対応に裏付けられた有意義な特徴を見いだすことができるとしながら、対の一方の「相対他動詞」についてはその意味構造の定式化を提示している。

第Ⅲ部では、上に述べた「透明度の高い」動詞を代表するものとして、自動詞ナルを取り上げ、その意味領域の広がり进行分析・記述している。ナルは、主体の「変化」のプロセスを述べる語彙項目とされている動詞であるが、その用法には「変化」の意味が感じられないものも多く見られるとして、ナルの基本的な意味が現実世界から様々に拡張されることによって、多様な意味領域を獲得していることを論証している。具体的な議論として、一つには、ナルのアスペクトにおける無標形を扱っている。「このあたりは葛飾区にナル」という文のナルのような、ナルの「非変化」の用法を取り上げ、ナルの基本的な意味が推論のプロセスや発話行為といった語用的な条件によってその意味を拡大していると主張している。さらに、ナルのナイル形のうち、「変化の結果」を示さない用法を取り上げ、それらの用法は、ナルの基本的な意味が、ナルによって捉えられた状態の原因／理由、機能、構成等の語用的な要因によって、内的世界に比喩的に投影拡張することによって得られたものであると論じている。

第Ⅳ部では、他動詞表現についてその諸相を論じている。一つには、上と同じく、「透明度の高い」他動詞として（～ヲ）スルとヤルとを取り上げ、両者を対比しつつその異同を明らかにすることによってその他動詞としての本質的な性格を論じている。すなわち、形式（敬体・統語）と意味の両面からこの二つの動詞を見ると、両者の相違は、スルが独自の項構造を持たない意味的にも無色透明な形式動詞であるのに対して、ヤルは、その透明度は高いものの、通常、つまり、形式動詞でない行為指向の他動詞であることに由来していると主張している。さらには、「山田さんが家を建てた」のように、当該の文においては表現されていない介在（建てる行為を実行したのは大工さん）を介してある行為を実現する「介在の表現」を取り上げ、その基本的な性格と成立要因とを明らかにしている。すなわち、上の表現は「話者が実際には存在する被使役者の存在とその行為の過程を無視し、あたかも主語自身が一人で事態の全過程を行ったかのように見なしている」表現とし、そこには、そのような認知的な特徴に裏付けられる「事態のコントロールの能力」と「動詞の意味的焦点」という2つの要因が関与していると指摘している。

審査の結果の要旨

本研究は、動詞の自他の対応という問題を単なる自動詞・他動詞の定義といった狭い範囲の議論にとどめることなく、ヴォイスの体系全体の中で包括的に捉えようとしたものであり、そこに示されている、自他の全体を見ようとする視点、視野の広さ、また問題を多角的に捉えようとする柔軟さなどは、本論文の学術的な価値を非常に高いものにしてている。すなわち、ヴォイスの体系内における自他対応の位置づけを、近年よく用いられているプロトタイプ論に取り入れて、受動や使役というヴォイスを構成する他の文法カテゴリーと対比しながら論じていること、また、自他の対応を有するものを「相対動詞」、一方の欠落しているものを「絶対動詞」として、両者を対比しながら自他の位置づけを論じていること、さらに、具体的な動詞の分析においては、「透明度の高い」もの、「低い」ものという捉え方から問題を整理していることなど、その方法論、主張、提案の展開等において独自性と説得力とが広く認められる。そして、それがこの問題に対する本研究の言語学的な完成度の高さを支えているとともに、この分野の研究の今後の展開に本研究が資する可能性を示唆している。

議論には、やや演繹的すぎるかと思われる所がまま見られ、今後の研究に期待したい問題も残されている。しかしながら、もちろん、それによって本研究の完成度が損なわれているわけではない。

以上、本研究は、博士（言語学）の学位に十分相当するものと認められる。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。